フィールド（現場）からの風 189

宮田守男

「渋滞学」の視点から地域や職場を見つめ直す大切さについて考えてみませんか

6月中旬、松本信用金庫の取引先でつくる「しんきん同友会」が松本市内のホテルで開催した、東京大学先端科学技術研究センター教授の西成活裕さんの「しごとの渋滞学～西成流・仕事の効率をあげるコツ」の講演を聞く機会があった。日本テレビ「世界一受けたい授業」の番組で講義内容の面白さは知っていたが、49歳より若く見える風貌に会場が和む。専門は、理数系物理学だが、さまざまな渋滞を分野横断的に研究する「渋滞学」を提唱した事でも知られている。

著書で紹介された講師の遍歴、院生時代「ホームレス」になったあげく、銭湯が高すぎて洗濯機を風呂代わりにしていた事は、知的な現在の雰囲気からは想像もできない。この経験が、当たり前の見方を、異なる角度から見つめられるようにしたのだろうか。

一般に渋滞と言えば車の渋滞を発想させる内容だが、「渋滞学」は、「それまでの流れていたものが詰まってしまう現象全般を渋滞と捉えている学問」だ。車・人・物質、流れのあるところには、詰まりが発生しがちで、その原因を探り、詰まりを解消していこうとの考え方が根本理論だと知る。

シゴトの渋滞解消には、3つの戒め。「いまさえよければ（短期的視野）楽あれば苦あり、苦あれば楽あり」、「ここさえよければ（部分最適化）井の中の蛙、大海を知らず。木を見て森を見ず」、「自分さえよければ（利己）情けは人のためならず」など長い期間、語り続けられている言葉だ。だが、誰しもが理解する内容を、実行できずにいる事も事実だ。

無駄を考えるアドバイスが参考になった。目的を定めるときは、別の目的では有益になっているかもしれない事を。期間を定める時は、いつか役立つかもしれない事を。立場を決める時には、誰にとって無駄なのかを。長期的視野、全体最適の視野、利他の心の大切さを知る事ができた。講演は、渋滞する実験の様子を動画で紹介。1台の車が、高速道で軽くブレーキをかけると結果、後続車が次々とブレーキをかけ渋滞が発生する様子や、アリの行列は混んでいても間を詰めないため混雑しない事は興味深かった。多くの現場で、無理して仕事をしている状態は、一見、生産性は高いが、一気に大渋滞の現象に陥りやすい。科学的ゆとりが大切との話を大北地域の多くの指導者や経営者も聴いてほしいと感じた講演でもあった。

（NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上）

西成流「利益」より「永続性」の講話内容は、90分の時間を忘れさせる楽しい時間だ